

令和7年4月1日



vol. 06



2025.04.01 Spring
Jozaisan Hondoji public relations

jozai ryoju sen

常 在 靈 鷲 山

Ohanami no kisetsu "hana yori dango" naranu "hana yori jiho" ohanami no otomo ni hondoji no jiho wo issatsu dozo



Hondoji yoi tera ikitai otera sonnna kimochi ni kitto nareru issatsu wo anata ni otodoke itashi masu

毎年、十一月一日から二月十日までの壹百日間、

千葉縣市川市にある日蓮宗の大本山

「正中山法華経寺」にて行われる修行がある。

その名を「日蓮宗大荒行堂」。

荒行堂の一日は午前二時半の起床に始まる。

暁天三時から深夜十一時に至るまで、

約三時間おきに寒水に身を清める「水行」を軸に、

荒行堂の本堂にあたる「中堂」での読経と

書写行、荒行堂運営の為の諸役に費やされる。

全ての課業が終わるのは、やがて日付が変わる

午前〇時頃。睡眠時間は二時間半程度。

食事は僅かに白粥一汁一菜である。

その厳しさから「世界三大荒行」の一つに

数えられているが、毎年、全国から百名ほどの僧侶が

志願し、外界から隔絶された結界の中で苦修錬行に挑む…。

寒水白粥 凡骨將に死なんとす

寒水白粥凡骨將死

日蓮宗大荒行堂

理懺事悔聖胎自生

理懺事悔 聖体自ずから生ず

実は、大荒行堂での修行は全ての僧侶に課されるものではない。

あくまでも、自ら志した者だけが挑む修行である。

強制では無い修行に、なぜ多くの若き僧侶たちが挑むのか？

その目的は、日蓮宗に連綿と伝わる「祈祷」の相伝を受け、

これを体得することにある。日蓮宗には「木剣」という

特別な法具を用いた祈祷法が伝えられており、

これを「修法」と呼ぶ。修法の根幹は「祈ること」。

全身全霊での祈りを前提とするこの秘法を

身に付ける為には、自らを極限まで追い込む

荒行堂での修行が不可欠なのである。

また、一口に祈祷といっても、その中身はとても奥深く、

一回の修行だけで秘法の一切を習得することは

到底できない。初めての荒行堂での修行を「初行」、

二回目を「再行」、三回目を「参行」、四回目を「二二行」、

五回目を「五行」、それ以上を「参籠(さんろう)」と呼ぶが、

行を重ねるごとに行数に応じた祈祷法が伝授され、五行まで

終了して初めてすべての秘法を習得できるのである――。

おかげさまで

無事、成満

令和七年二月十日午前六時。

この日、この時、この瞬間、十一月一日の入行会以来、百日振りに「瑞門」が開かれました。

この「瑞門」は、荒行堂と外の世界を繋ぐ唯一の出入り口で、修行中は外から鍵を掛けられ、

閉ざされてしまいます。外部からの情報も完全に遮断されるので、世界から完全に隔絶された

文字通り「結界の中での修行」となります。

そんな訳で、開いている瑞門を目にした瞬間の

あの気持ちは、なんと表現したら良いやら…。

「万感胸に迫る」とはこのことを言うんだな、と。

改めまして、この度おかげさまで「日蓮宗大荒

行堂」での壱百日間の修行を無事成満する事が

できました。今回は「初行」…すなわち人生初と

なる大荒行堂での修行だったのですが…。

いやはや、噂には大変なところだと耳にしており

ましたが、実際に身を投じてみると、もう…

それはそれは…。想像の遥か上を行く世界だった

ただ、申し上げておきましょう(笑)。

午前二時半の起床に始まって深夜〇時に一日の課業が終了するまで、行住坐臥すべてが修行で

す。関東特有の、刺すような空つ風が吹きすさぶ

中、暁天三時の一番水から深夜十一時に至るま

で、三時間おきに水をかぶり、その間はひたすら

早朝より、寒い中お迎えに来て頂き、本当にありがとうございました。



中堂で読経か、行堂運営の為の諸役(＝各部署の仕事)で行堂内を走り回ります。

食事は僅かに白粥一汁一菜。睡眠時間に至っては二時間半程度なんだから驚きです。

暖房は…やっぱり有りませんでした(笑)。

そんな環境下で「清浄衣」という麻の衣と白衣の



計二枚しか着ていないので、寒くて寒くて…。
入行前、大した根拠も無しに

「雪国北陸に比べれば、スツキリと晴れる日が
多い千葉の寒さなんて大したことなからう」
と高を括っていた自分が物凄く恥ずかしいです。
そんな状態なので、ふと

「なんで自分はここにいるんだっけ？」

と、今、自分が置かれている状況がよく分からなくなる瞬間がちよくありました…。

とまあ、なんやかんやと色々ありながらも、
百日間、全精力を注いで修行に臨むことが出来たのは、やはり共に修行に励んだ「同行」の存在が
大きいな、としみじみ思います。

今年は全体で百十七名の行僧が荒行堂に挑みま
した。その内、初行僧は私を入れて四十九名。
お互いに初めての荒行堂ということもあって、
慣れない環境の中、些細な事で喧嘩をすること
も多々ありました。しかし、お互い励まし合って、
みんなで艱難辛苦を乗り越えたのも事実です。
先輩僧、そしてこの四十八名の仲間抜きに成満
は成し得なかったと思うのです。「同行」の存在の
大切さを腹の底から感じた百日間でした。

実は、荒行堂に入る前から、こんな質問を頂く
ことが多々ありました。

「なぜ、わざわざこんな厳しい修行に身を投じる
必要性があるのか？」と。



うーん…。正直、答えに窮する質問です(笑)。

荒行堂に入る前は

「この修行を完遂しないと、日蓮宗のご祈禱が
出来ないんですよ」

とマニュアル通りの答えをお返しするのが精一杯
でしたが、成満した今だからこそ、ひとつだけ
言えることがあります。

それはあの極限の修行は

「醜い自分の、最低な姿を見るためのものだ」
ということです。

寒くて、眠くて、空腹で、もう本当にどうしよう
もない、そんな極限の状況下に置かれると人間、
普段は考えもしないような、自分でも信じられ
ない最低な行動に走ることが多々あります。

普段、したり顔で道徳を説いている自分が、日常
の恵まれた生活の中では絶対に顔を出すことは
無いであろう、自分の内に存在する「醜い本性」
を目撃した時の衝撃たるや。

情けないような、悲しいような、何とも言えない
惨めな気持ちになります。

しかし、これと向き合うことに意味があると思う
のです。自分が本当にどうしようもない凡夫だと
自覚したとき、もつと言えは己の底が見えた時、
逆に「尊い部分」も見えてくるのではないか。

そんなどうしようもない自分でも、誰かの為に身
命を賭して祈る事が出来るんだ、という「菩薩
としての自覚」が現れてくるのではないか…。

これが、百日間を通して私が導き出した、修行の
意味についての一つの結論です。

さて、場面は二月十日の午前六時に戻りま
す。瑞門が開き、百日振りに外に踏み出すと、聖
教殿の前から続く参道の両脇には、全国各地か
らお迎えに来られた檀信徒さんたちがひしめき
あっておりまして。その間を大声でお題目を唱え
ながら行列を組んで歩いて行く…。

百日前、これと全く同じ構図で瑞門に向って歩いた時は、溢れる不安で心臓がはち切れそうだったな……。なんて考えながら歩いておりました、ひしめき合う檀信徒さんたちの中に、なんだかとても見覚えのある姿が……！

何を隠そう、総代の大谷光則さんを筆頭に、石川県から遠路はるばる十名の方々が迎えに来て下さったのです。その時は、もう嬉しくて嬉しくて……。ただ、近付いて行っても、みなさんは一向に気が付いてくださらず……。

行列から離脱する訳にいけないので、みなさんの方に目を向けつつ、

「頼む……気付いてくれ……！」

と念じながら前を歩いたのですが、ついぞ気付いてもらえず……。あとから聞いた話ですが、その時は通り過ぎてから、今通って行った行僧が私だったと気が付いたとのことでした(笑)。



そりや、当然です。百日前と人相がまるで変わってしまったているのですから(余談ですが、スマホの顔認証が一週間ほど解除出来ませんでした)。

出行後、一時間ほど中山の街中を練り歩いたのですが、だんだんと夜が明け、東の空に太陽が昇ってくる頃に思ったのは

「空ってこんなに広かったんだなあ……」

さながら、刑期を終えて出所してきた人の感想ですが、改めて思い返してみれば、空をボーッと見上げている余裕も暇も無かったんです。

瑞門から出発した行僧一行は、中山の街中に点在する諸堂を一時間ほど参拝して回ったのち、再び中山法華経寺に戻りました。

鬼子母神堂に入って一読の後、最後は祖師堂にて「成満会」を厳修しました。ついにここで「許証」が授与され、名実ともに「修法師」としての一步を踏み出すことになりました。これを以て百日の荒行堂は全行程が終了。百日間待ちに待った瞬間なのに、不思議と実感が湧かないものです。

外堂で解散式をしたのち、檀信徒のみなさんと合流することが出来たのは、午前十時頃でした。外堂前でみなさんと再会した際、今度こそ、ちゃんと気付いて貰えてホッとしてました(笑)。

そのまま、一緒にバスに乗って石川県に帰りました。私ですが、私は翌日から始まる北陸教区

巡行に向わねばならず……。

下総中山駅で一旦みなさんとお別れしました。

石川県から千葉県までの遠い道のりをはるばる来ていただき、さらには早朝の冷え込みの中、私の出行を待っていてくださったこと、感謝の念に堪えません。衷心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



聖教殿の前にて、記念写真を撮影。

帰山奉告式

二月十四日、当山の本堂にて私、智龍院日優

こと法花堂正匡の「帰山奉告式」を奉行いたしました。「帰山」とは、修行先から自坊へ戻ることを意味します。特に、日蓮宗大荒行堂の無事成満を自坊のご神仏に謹んで報告申し上げる式典を「帰山奉告式」（以下、帰山式）と呼ぶのです。

大荒行堂の成満から四日目にしての帰山でしたが、その間は遊び回っていた…わけではないんですよ（笑）。出行翌日の二月十一日より始まった北陸地区の「巡行」に行っておりまして。

この「巡行」、大相撲の「巡業」と字面は似ており

ますが、中身は違います。百日間、修行を一緒にさせていただいたお上人方の、各ご自坊での帰山式や、それに付随する祈禱会に出仕させていただくのが日蓮宗の「巡行」です。

今行堂には、北陸地区（新潟県・富山県・石川県・福井県の計四県）から、私を含めて十名が入行しました。この十名の荒行僧の帰山式すべてに出仕すると、どれだけ少なく見積もっても十日はかかることとなります。その他、北陸地区内のご寺院様よりご祈禱会にお呼ばれたり、北陸地区以外のご寺院様の帰山式や祈禱会にお呼ばれることもあり、そうなってくると巡行だけで優に一カ月かかる…なんてこともあるそうです。

今回は二月中にほぼ区切りが付きましたので助かりましたが、三月のお彼岸ギリギリまで巡行が続くと考えると…ゾツとしますね（笑）。

また、これも独特なんですけど、帰山式を終えるまで自坊の山門をくぐれない、という慣習もあります。下手すると半月ほど自坊に戻れない、という事例もあるそうです。恐ろしいですね…。まあ、なんやかんやと色々あるわけですが、おかげさまで私は出行後四日目で帰山を果たすことが出来まして、心底ホッとなりました。

大荒行堂の帰山式は、これに先立つ「帰山行列」から始まります。「帰山行列」とは、檀信徒のみなさまによる先導の下、修行僧が行列を組んで

お寺まで練り歩くことです。今回は当山参道下の石塔を出発地点に、本堂までの約四百メートルの道のりをゆつくりと進みました。天気が心配でしたが、幸い行列中は晴れ間が見え、幸先の良いスタートとなりました。

山門をくぐって本堂に到着後、水行となります。五行上人もいらつしやる中、最前列で導師を務めさせて頂くのは、凄いプレッシャーで…。



檀信徒が見守る中、参道を練り歩く。



しかも前後左右には檀信徒のみなさまが…。
行堂内で百日間、何百回と繰り返し、徹底的に
身体に叩き込んだ水行。しかし、自坊で、しかも
檀信徒のみなさんの目の前でする水行は、一味
違いますね(笑)。

水行後、いよいよ御宝前での帰山奉告式となり
ます。私の帰山式ですので、当然のことながら、
こちらも最前列で導師を務めさせて頂き…。
言うまでもなく、それこそ口から胃が飛び出ん
ばかりに緊張しました。

「奉告式」とある通り、帰山式では、無事修行を
終えて帰山した旨をご神仏にご報告申し上げる
「奉告文」を御宝前で読み上げます。実はこの



奉告文、ただでさえ時間が無い行堂内で、あの手
この手で時間を捻出し、眠くて働かない頭を必
死に回転させて書き上げたもの。

もちろん、パソコンなんて便利なものはありませ
んから、全て手書きです。

ですから、御宝前にて読み上げた時、次々と脳裏
をよぎったのは、百日間の様々な思い出。ここに
来てようやく「いよいよ帰って来たんだな…」と
実感が湧きました。

奉告式に続いて、星祭を兼ねた加持祈祷会を
厳修しました。ついに、檀信徒のみなさまの前に
て、荒行堂で体得した修法を披露する瞬間
が…。一番の不安の種だった木剣加持。どうな
ることかと思いましたが、特訓の成果もあって無
事に振り切ることが出来ました。



五行の井前本康上人より、谷口不二夫さんへ表彰状の授与。

日程の都合上、やむを得ず平日に開催させてい
ただいた今回の帰山式。それでもたくさんの方々
にご参詣いただき、おかげさまで盛会裏に無事
円成することが出来ました。これもひとえに、
ご多忙の中、準備段階からお手伝い頂いた地元
管区のお上人様方、そして当山の総代様や世話
人様を始めとする檀信徒の皆様方のご協力が
あったからこそです。たくさんの方々にお迎えい
ただいて、改めて「沢山の方々の想いを背負って
百日間修行して来たんだなあ…」と、気が引き締
まる思いです。その想いにお応え出来るよう、
なお一層の精進を重ねて参る所存です。
本当にありがとうございました。



年中行事のご案内

四月二十一日(月)午後二時	日像上人法難会
四月二十二日(火)午後二時	稲荷大明神祭礼
五月八日(木)午前六時	釈尊降誕会
六月九日(月)午後一時	千巻陀羅
八月一日(金)午後一時半	魂迎会施餓鬼法要
八月十六日(土)午後七時	七面大明神大祭(逮夜)
八月十七日(日)午後二時	七面大明神大祭

お誘い合わせの上、ご参詣ください



表紙の写真
「帰山行列」(きざんぎようれつ)

帰山奉告式に先立ち、修行を終えた行僧達が檀信徒のみなさんに先導されて参道を練り歩きます。
これを「帰山行列」と呼びます。
地域によっては、途中で檀家さんのご自宅に招かれて草鞋脱ぎををするところもあるそうです。
約四十年前に現住職の帰山式をした時は能登部駅から約二キロの道のりを歩いたとか…。
幸い天気にも恵まれ、平日にも関わらず多くの方々に参列して頂き、無事に帰山を果たすことができました。

編集後記

二月十日に荒行堂を無事成満した後、北陸地区を巡行しつつ、二月十四日に帰山。二十日過ぎにはその巡行も落ち着いたので、荒行堂の成満・帰山のご報告かたがた、すぐにでも寺報を出したかったのですが…。
精も根も尽き果てた状態では、どうにもこうにも筆を執る気力が湧かず、パソコンに向う気にもなれず…。ようやくと記事を書き始めた頃には、すでに三月も半ばを迎えようとしておりました。

まあ、そんなこんなで色々あった訳ですが、おかげさまで寺報第六号も、なんとか冊子の形に纏め上げることが出来ました。

思い返してみれば、昨年度は冬号を出したきりで、春・夏・秋・冬と四回も寺報の発刊をサボってしまいましたので、なんやかんやで一年振りの寺報です。ほんのちよつとだけですが、表紙がリニューアルして帰って来ました。お手に取っていただけるだけでも、もちろん嬉しいのですが、中身に目を通していただき、大荒行堂での百日間に思いを馳せて頂けますと、

当事者として大変有難い限りです。

それでは、それでは。



常在山本土寺寺報『常在霊鷲山 Vol.6』

発行所 常在山本土寺 編集 法花堂正匡

〒929-1601

石川県鹿島郡中能登町西馬場二部三番地

電話 0767-72-2235

FAX 0767-72-2281

ホームページ

<https://www.jozaisan.org>

